

中年期前期女性の時間的展望とアイデンティティ

立命館大学応用人間科学研究科

対人援助学領域

発達・福祉臨床クラスター

1. 目的

本研究は、人生の折り返し地点にきた中年期前期（40代）女性の時間的展望とアイデンティティを明らかにすることを目的として実施された。本研究では中年期を「40から59才」と捉え、本研究の対象である40代は中年期と区別するために「中年期前期」と呼ぶこととした。本研究は、仕事においてそれなりの地位を築きながらも自己の限界を感じ始める、家庭においても子どもに手がかることが少しずつ減り、自分を見つめ直す機会が増える、また身体の衰えも感じはじめる、など様々な変化が起こりはじめる中年期のはじまりである中年期前期（40代）女性の時間的展望とアイデンティティを明らかにすることを目的とする。明らかにする内容は、中年期前期（40代）女性の 時間的展望の実態 アイデンティティの実態、 時間的展望とアイデンティティとの関係、 中年期前期（40代）の意味づけ、 現在の行動や時間的展望、アイデンティティにも影響を与えると報告されている時間的指向性の違いをもたらす要因の検討、の5点である。本研究では、以上の5点について、量的な面と質的な面の両面から検討を加えるために、2つの研究を行う。研究1では、中年期前期女性（40から49才）と青年期女性（20から24才）を対象に質問紙調査を実施し比較することで、量的な面から中年期前期女性の時間的展望とアイデンティティについて検討を行った。研究2では、中年期前期女性を対象にインタビュー調査を実施し事例研究を行うことで、質的な面から中年期前期女性の時間的展望とアイデンティティについて検討を行った。

2. 研究1

質問項目は、白井（1991）が開発した時間的展望に関する3つの尺度「時間的指向性」「時間的態度」「見通し期間」と、加藤（1983）が開発した「アイデンティティ地位」を用いた。分析対象者とサンプル数は、20代学生48サンプル、40代有職者183サンプル、40代無職者108サンプルであった。40代有職者の職業は、フルタイム17名、パートタイム166名であった。本研究の有職者は、パートタイムの有職者が中心であった。分析の結果、中年期前期（40代）女性は、20代学生より「目標指向性」が低く、アイデンティティ拡散地位が多いことが見出された。中年期に起こるとされている時間的展望の逆転と狭まりは20代学生より中年期前期（40代）女性が意識していることも示された。また専業主婦とパートタイムで働く主婦の間には、時間的展望とアイデンティティに違いがみられないことが示唆された。

3. 研究2

研究 2 では、質問紙調査に協力してくれた人から職業有無別・時間的指向性を掛け合わせた 4 タイプ各 3 名ずつ（合計 12 名）にインタビューを依頼し半構造的面接を実施した。研究 2 から、時間的指向性が時間的展望、アイデンティティ、中年期前期（40 代）の意味づけに影響を与えていることが示された。その結果から、ポジティブ指向は、「長期展望・目標指向型/自己実現重視タイプ」、ネガティブ指向は「短期展望・現状維持型/家庭重視タイプ」と名づけた。

4．研究 1 と研究 2 を通じて明らかになったこと

研究 1 と研究 2 の 2 つの研究を通して以下の 5 点が確認できた。中年期前期（40 代）女性は、目標指向性が低い アイデンティティ拡散地位が多い アイデンティティの危機が起こっている人がいるが、その危機を乗り越え再構成できる人とできない人がいる、専業主婦とパートタイムで働く女性の時間的展望とアイデンティティは同じ傾向を示す、時間的指向性は、時間的展望とアイデンティティと相互に関連しているという 5 点が明らかになった。

5．問題点

中年期前期女性の時間的展望については、今回の研究で明らかにすることができたと考える。しかし、アイデンティティについては中年期のアイデンティティをどのように捉えるかということが十分に検討できておらず不明確であったこと、アイデンティティを捉えるために使用した尺度も、時間的展望と似た項目になっていたため、アイデンティティを深く捉えることができなかったなどの問題点が残った。そのため今回のアイデンティティに関する結果や考察については、更に十分な検討が必要であると考ええる。